

小学校英語指導力育成のための ストラテジー・トレーニングの方向性

永 倉 由 里

The Outline of Strategy Training for Developing Skills to Teach
English to Elementary School Students

Yuri NAGAKURA

2018年11月7日受理

抄 録

実践研究とは、様々な側面からその営みへの理解を深め、teaching と learning の質を高めるために教師自身が行うものである（滝沢他、2016、p.278）。

筆者は、担当する科目を問わずあらゆる授業実践が人格形成に寄与するものと考え、実践研究を継続している。そこでは、自律性のある（autonomous）英語学習者の育成を主な目標とするストラテジー・トレーニング（Strategy Training, Chamot et al.(1999)等）として授業を行うことを基本とし、指導法や省察方法の改善に取り組んでいる。

本稿では、小学校教員を目指す教育学部生を対象とする「小学校英語指導Ⅰ」について、同科目において念頭に置くべき①新学習指導要領が求める言語習得理論に則した英語学習の在り方と② Strategy Training の共通点を明らかにするとともに、過去2年間の実践概要に触れ、次年度の①と②の関係性に焦点を当てた授業実践研究の方向性を示す。

キーワード：実践研究法、学習者理解、授業分析、第二言語習得、小学校英語教育

1. はじめに

筆者は20年あまり実践研究を継続している。「実践研究とは、様々な側面からその営みへの理解を深め、teaching と learning の質を高めるために教師自身が行うものである（滝沢他、2016、p.278）」であり、そこには、ゴールも結論もない。なぜなら授業を取り巻く環境は常に変化しているからである。従って、現在の文脈での問いは何なのか、これまでの実践や研究方法のうち今後も継続すべきものは何か、新たに導入すべきものは何かを検討し続けなければならない。

本稿では、小学校教員を目指す教育学部生を対象とする「小学校英語指導Ⅰ」につ

いて、同科目の内容と受講者の特徴を整理し、次年度の授業実践の方向性を検討する。

まず、「小学校英語指導Ⅰ」において念頭に置くべき①新学習指導要領が求める言語習得理論に則した英語学習の在り方と②自律学習者への成長を促すストラテジー・トレーニング（Strategy Training）の共通点を明らかにする。次に、過去2年間の実践内容並びに受講者理解の手法と省察結果に触れ、続いて次年度の実践研究の方向性を示す。

2. 進行中の教育改革の文脈と対象学生の現状

平成23年に必修となった外国語活動を小5、小6の2年間経験した者が大学生になるのは平成31年度である。平成30年度の1年生は小6の1年間のみ外国語活動を経験している。

「小学校英語指導Ⅰ」を受講するのは教育学部初等教育課程の2年生なので、これまでの受講者のうち外国語活動を経験している者はごく少数である。中高ともにコミュニケーション重視の授業が展開していたはずだが、入試対策に重きを置いていたと語る学生が多い。

しかし、彼らの多くは小学校現場で英語教育を担うことになる。新学習指導要領に沿って人生を主体的に切り拓くための学びの三要素すなわち「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を育成することになる。

特に英語教育では、実践的な英語使用に耐えうる知識・技能、態度の育成を掲げており、小学校教員を目指す者は、言語習得理論に則った指導がどんなものであるかを理解し、新しい学習観や指導観に基づく教育を推し進めなければならない。しかしながら、受講生の多くは入試対策に終始し、推奨されている「学び方」を体験しその効果を実感するには至っていない。そのため各自がこれまでの英語学習を振り返り、現時点での英語運用能力や英語学習に関連する諸要因を捉え直してみる必要がある。具体的には、効率が良いとされる言語習得理論に則した「学び方」を経験しそのプロセスを省察し、その特徴と効果を実感すべきである。

筆者が長年取り組んでいる Strategy Training は、自律性のある英語学習者の育成を主な目標とするものであるが、その「学び方」は、新学習指導要領が求めるところと重なる。ともに言語習得理論に則り実践的な英語使用に耐えうる力の育成を目指している。

Strategy Training は、新たな「学び方」を試行しながらそのプロセスを観察・評価することも求めている。やる気を維持し成長し続けることのできる自律学習者を目指しているのである。Strategy Training はメタ認知能力の醸成にも重点を置くため様々な変化に対応しながら、教育の改善に尽力する「成長する教師」の姿と重なる。

一方で、学習への取り組み方となると、生来の性格に因るものと考える傾向もあり、一般に短期間の実践で効果を期待するのは難しい。それでもなお、近い将来、児童の主体的創造的な学びをサポートすることになる学生たちにこそ、自律性を高めることの意義を知り、そこを目指す方略を追求してもらいたいと思う。

ここからは、平成 29 年度と平成 30 年度の実践概要を紹介する。

2. 1. リアリスティック・アプローチによる省察（平成 29 年度）

筆者は長年 Learning Journal への自由筆記を求め、「ラベル付け」等の手法を用いて分析し、学生へのフィードバックや授業改善につなげてきた。永倉(2017)では、リアリスティック・アプローチ(Korthagen et al., 2008)に基づき、より体系的な省察手法を導入した。

同アプローチは、省察プロセスにおいて学術的知識と経験から得られた実践知とを結びつけ、学習者の内的なニーズを見落とすことなく、教師と学習者双方が授業という学習経験を省察することを求めている。

授業中には、教師も学習者もそれまでの経験からそれぞれの感情や習慣などが無意識的に働く。そうした授業中の行動につながる様々な要素を包括的に省察するための理想的なプロセスとして ALACT モデル(図 1)が示されており、5つの段階を踏んで省察が行われる。

第 1 段階の授業などの行為 (Action)に始まり、第 2 段階では行為を振り返り (Looking back on action)、第 3 段階ではそこにある非合理的な面あるいは不安や心配をもたらす原因つまり本質的な諸相に気づき (Awareness of essential aspects)、第 4 段階ではそれ以外の選択肢を吟味し (Creating alternative methods of actions)、第 5 段階の試み (Trial)につなげる。そして、試みを加えた行為に対しても省察は継続され、スパイラルのようにモデル上を動き続ける。

さらに Korthagen et al.(2008)は、省察の質を高めるための 4 つの枠組みを提唱している。すなわち、客観的に描写・理解が可能な行動 (doing) とそれをもたらした思考 (thinking)、さらに非理性的なレベルである感情 (feeling) 並びに目的 (wanting) を意識的に省察せよというのである。

ALACT モデルでは、特に第 2 段階「行為の振り返り」と第 3 段階「本質的な諸相への気づき」での省察が重視され、チェックリストとして教師並びに学習者の視点からの「8 の問い」が示されている(表 1)。

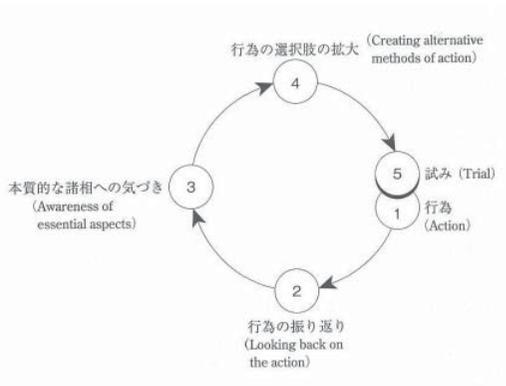


図 1 省察プロセス：ALACT モデル

表1 ALACT モデルにおける「8つの問い」

文脈はどのようなものでしたか？（内容・文脈）		
1. 実践者は何をしなかったのか	目的 (wanting)	5. 学生は何をしなかったのか
2. 実践者は何をしたのか	行動 (doing)	6. 学生は何をしたのか
3. 実践者は何を考えていたのか	思考 (thinking)	7. 学生は何を考えていたのか
4. 実践者はどう感じたのか	感情 (feeling)	8. 学生は何を感じていたのか

学生が Learning Journal に記したコメントを読み取り、表1の該当欄に書き込んでいくのである。

2. 1. 1 行為 (Action, 授業概要)

実践期間：平成29年4月～8月上旬（平成29年度前期）

対象学生：教育学部初等教育課程 2年生59名、3年生9名、4年生10名。

授業の前半は小学校英語活動に必要な英語運用能力の育成のため6種の活動（表2の2～7）を「帯活動」の形式で体験させ、そこでの狙いや学生が経験してきた学習法との違い（学習方略、協同の仕方、情意など）への気づきを促した。授業の後半はワーク・ショップ形式で実践例を紹介し（学生は児童役）、その翌週には各自が作成した指導案に基づき5～6分程度のマイクロ・ティーチング（4人グループ、3人が児童役）を行わせ、ルーブリックを用いた自己評価・相互評価を求めた（表2参照）。

表2 1コマ(90分)の授業概要

1	Oral Introduction (5分)	筆者自身の Small Talk
2	Icebreaking (=Who am I) (5分)	< Pair Work > 授業に関する出題で。
3	合いの手チャンツ (2分)	BGMに合わせて Well 等の合いの手を発する。
4	Children's Songs (10分)	歌詞を見ないで CD にかぶせて歌う。
5	Classroom English Quiz (10分)	< Pair Work > S ₁ (出題者)：日本語を読み上げる。 S ₂ (解答者)：テキストを見ないで英語を言う。
6	1-minute Free Talk (自己紹介、好きなもの、体験など) (6分)	< Pair Work > S ₂ ：1分間の Free Talk。 S ₂ ：合いの手を挟みながら S ₁ の発語数を測定。
7	2-minute Dialogue (4分)	< Pair Work > 直前の 1-minute Free Talk の内容について 2分間対話を楽しむ。
8*	(* 偶数回目の授業の後半) 指導例の紹介 (40分)	ワーク・ショップ形式で典型的な活動例を紹介。学生は児童役。
8**	(** 奇数回目の授業の後半) マイクロ・ティーチング (模擬授業) 最後の2回分は録画。(40分)	< Group Work > 3人(児童役)に対しマイクロ・ティーチング。ルーブリックを用いて自己評価及び相互評価を行う。指導案は添削して返却する。
9	Learning Journal への記載 (3分)	Classroom English Quiz, 1-minute Free Talk 等の結果とその日の授業についての自由記述。

2. 1. 2 行為の振り返り (Looking back on action)

学生は、授業の最後に Classroom English Quiz(約 30 問中の正答数), 1-minute Free Talk の結果 (1 分間に発した語数) とその日の授業について思うところを自由に記述し、筆者は気づいた事柄を授業メモとして残した。

2. 1. 3 本質的な諸相への気づき (Awareness of essential aspects)

Learning Journal への記載と筆者の授業メモを用いて、ALACT モデルにおける「8つの問い」の表を埋めていき省察を深めた (2.1.6 参照)。

2. 1. 4 行為の選択肢の拡大 (Creating alternative methods of actions)

これら8つの視点から行為を振り返ることで、よりメタ的な思考が可能になった。教員志望の学生ならではの提案にも助けられ、新たな試み (Trial) に繋がった。

2. 1. 5 試み (Trial)

改善策を試行し、再び ALACT モデルに沿って省察が行われた。

2. 1. 6 ALACT モデルに即した省察例

毎週、Learning Journal に目を通しコメントを記して返却する。肯定的な意見に安堵したり、思いもよらぬ指摘にハッとすることもある。そうこうするうちに検討すべき課題が頭をもたげてくるため前述の8つの問いの表を埋めていくことになる。この作業において、8つの欄の内1つか2つ、時には3つが空欄のままになってしまうことがある。それが教師からの視点からのものであれば、空欄が埋めることで省察の幅が広がる。学生の視点からの問いに関しては、再度 Learning Journal を読み返したり、振り返りの途中経過を学生たちにフィードバックし、空欄に当てはまるような意見があれば Learning Journal に記すよう協力を仰ぐこともあった。

これは教師の成長を促す「教師教育学」として考案されたもので、教員志望の学生からは具体的な提案や指摘も見られた。自身のこだわりにも似た感情や学生の受け止め方との間にあるズレに気づかされることもあった。こうしたプロセスを学生たちと共有しながら、行為の選択肢を広げ、授業を修正・改善することになる。

以下 (表3, 4) は、1-minute Free Talk とマイクロ・ティーチングについて行った省察の実例である (カッコ内は Learning Journal に記載した人数、現状▼を検討し、選択肢の拡大◇につなげた)。

表3 1-minute Free Talk についての省察→改善策→終盤での自由記述等

1-minute Free Talk(自己紹介や好きなことなどのテーマごとに話の大筋や使いたい英語表現を書き出したScrapbookを使いながらのFree Talk。聞き手は語数をカウントする。)		
<ul style="list-style-type: none"> 内容を整理して話して欲しい 暗記ではなくFree Talkにより練習の効果を感じて欲しい 	<p>目的 (wanting)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 咄嗟に話せるようになりたい(1) いろいろなことを話せるようになりたい(1) 表情豊かに話せるようになりたい(1)
<ul style="list-style-type: none"> Scrapbookを配り毎回テーマを定め1分間のFree Talkを行わせた 	<p>行動 (doing)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 1分間のFree Talkを行い、発話語数をJournalに記載
<ul style="list-style-type: none"> 準備の程度が活動に影響▼1 性格・情意が影響▼1 類似の活動経験が乏しい▼1 楽しげに取り組む者が増えた 	<p>思考 (thinking)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 良い活動だ(8)・Scrapbookは役立つ(8) 英語が出てくるようになった(6) 準備は必要だ(4)・このまま頑張りたい(4) シンプルな表現で話したい(2) 英語が出てこない(1)▼1 Scrapbookを読んでしまう(6)▼1 ネイティブと話したい(2)▼2 評価方法を知りたい(1)▼3
<ul style="list-style-type: none"> 準備が不十分な学生は、活動を楽しめていないのが残念 	<p>感情 (feeling)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手にわかってもらえると嬉しい(2) 相手のFree Talkを聞くのが楽しい(1) 1分なら話せるようになって嬉しい(1) 合いの手をはさめるようになってきた(4)

↓

▼1→◇暗記中心の学びとは大きく異なる、いわゆるタスク活動（考えながら話す）の特徴とその効果について解説し、この活動を通して徐々に楽しさが増し流暢さも増すはずであると助言

▼2→◇想定される対話者は英語母語話者に限らないことなど、この活動の意義への気づきを促した

▼3→◇評価方法を明示した（発話語数の合計を平常点とし、終盤で2回録音データを送信させた）

↓

「抵抗がなくなった」「話す機会が増え、力がついた」「対話形式の方が良い」の他、多用すべき学習方略であるにもかかわらず、「咄嗟に話せる力をつける方法を教えて欲しい」など短絡的な要望も依然として見られた。

表4 マイクロ・ティーチングについての省察→改善策→終盤での自由記述等

マイクロ・ティーチング(グループ内の児童役3人に対し行う。 自己評価及び相互評価。指導案は要提出。)		
・小学校外国語活動の指導案作成とマイクロ・ティーチングを経験して、授業実践力の基礎を身につけてもらいたい	目的 (wanting)	・授業実践力の基礎を身につけたい(4) ・Classroom English を使いたい(3) ・うまく作られた指導案の例を示してもらいたい(1)
・指導案作成+マイクロ・ティーチング(5～8分)を課した	行動 (doing)	・指導案作成+〈グループ・ワーク〉マイクロ・ティーチング(5～8分)を行った
・外国語活動の経験が乏しいためイメージを掴みづらいようだ ・グループ・ワークで学び合っ て欲しい ・対象児童、言語材料、言語活動、 教材・教具などの条件をどの程 度条件を絞るべきだろうか	思考 (thinking)	・役立つ(10)・他の発表が参考になる(8) ・児童同士が関わる活動がよいと思う(2) ・毎回メンバーが異なるのが良い(1) ・Classroom English が使えない(5) ▼ 2 ・どこまで英語で行うのか疑問(6) ▼ 2 ・指導案の書き方がわからない(4) ▼ 1 ・経験がなくイメージがわからない(4) ▼ 1 ・もう少し条件を絞ってほしい(3) ▼ 1 ・もう少し時間が長いほうが良い(2) ▼ 3 ・大きなグループで行いたい(1) ▼ 3
・受講者数が多く、スムーズに展 開しているとは言えない ・グループ・ワークを楽しんでお り、気のいい学生たちだ ・工夫を凝らして指導案を作ると 喜々として態度が見られる ・準備の程度が表情に現れる	感情 (feeling)	・児童役に楽しんでもらえてよかった(5) ・成長が感じられる(3) ・緊張する(1) ・指導案の添削はありがたい(2) ・アイデアが出ると嬉しい(2) ・別の専攻との活動がすごくいい(1) ・活動を考えるのは難しい(1) ▼ 1 ・ゲームや活動が思いつかない(1) ▼ 1

↓

▼1 →◇活動により目的が異なること、単元計画におけるそれぞれの活動の目的と望ましい組み合わせや順序について、指導案の具体例を配布して説明

▼2 →◇使用すると決めた Classroom English を頻繁に使用し、児童に慣れ親しませることを説明

▼3 →◇最終回は児童役を4人(ペア2組)、制限時間を7～10分とした

↓

全体として、マイクロ・ティーチングに関する記述が多く、「最初はイメージがつかめず困ったが、後半は資料や説明があってやり易くなった」「準備に時間がかかるが、非常に実践的で一番大切」など、主体的・協同的学びの重要性への気づきが見られた。Learning Journal を介したやり取りを評価する記述も多く、筆者にとっては分析やフィードバックがメタ的思考に導いてくれる点でその有効性は高い。

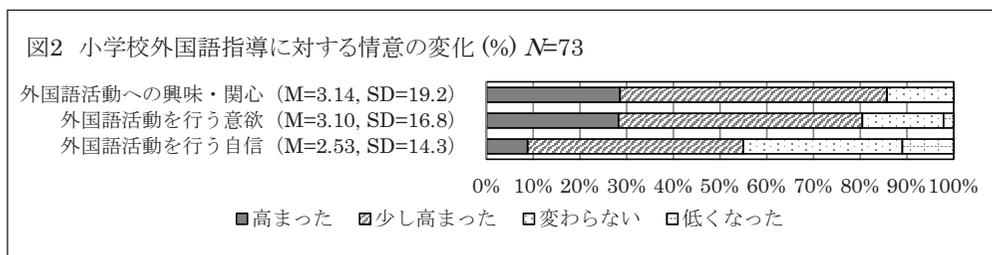
2. 2 アンケートの結果（平成 29 年度）

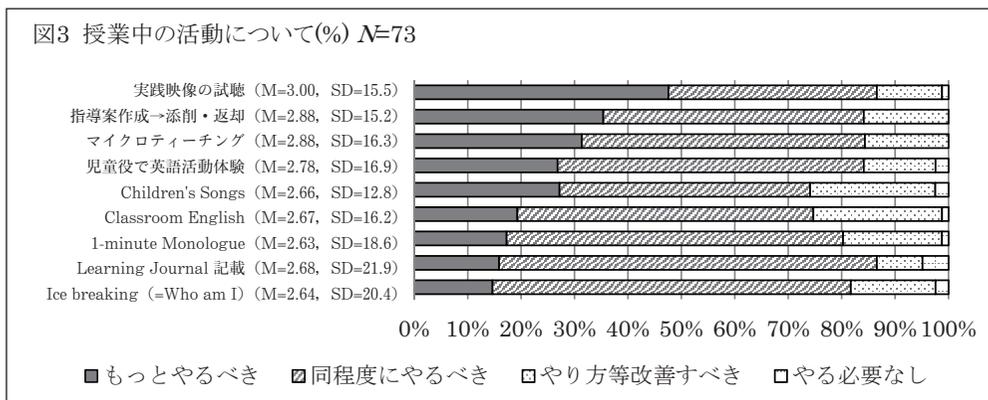
1 回目と 15 回目の授業で学習指導要領が示す小学校英語の目的や現場の実践状況についての理解度と指導に必要なと感じる英語力・指導力について自己評価を求めた（表 5、N=73、4 件法：4 = 理解している、行うことができる、3 = ある程度は理解している、ある程度は行うことができる、2 = ほとんど理解していない、ほとんど行うことができない、1 = 全く理解していない、全く行うことができない）。平均値の差に関する t 検定を行った結果、全ての項目で統計的有意差が認められた。

表 5 小学校英語指導の理解度と指導に必要な英語力・指導力に関する自己評価

	1 回目 M	15 回目 M	p 値両側		1 回目 M	15 回目 M	p 値両側
指導要領の目的・意義の理解	2.04	2.60	<0.0001*	基本的日常英会話力	1.86	2.66	<0.0001*
指導実践に関する知識	1.98	3.04	<0.0001*	語彙力	1.69	2.36	<0.0001*
小学校実践例の視聴・観察	2.11	2.91	<0.0001*	音声面のスキル	1.52	2.24	<0.0001*
指導の特徴と連携のあり方	1.69	2.61	<0.0001*	英文法・語法の理解	2.02	2.27	=0.0053*
指導案の作成	1.31	3.01	<0.0001*	ジェスチャーのスキル・態度	2.08	3.09	<0.0001*
教材・教具の作成・準備	1.39	3.03	<0.0001*	Classroom English	1.88	2.99	<0.0001*
模擬授業を行う力	1.30	3.04	<0.0001*	ゲームや活動を行う力	1.57	2.68	<0.0001*

小学校英語指導に関する情意にも変化（図 2、4 件法）が見られた。授業中の活動に関する意見（図 3、15 回目の授業で実施、N=73、4 件法：4 = もっとやるべき、3 = 同程度にやるべき、2 = 改善すべき、1 = やる必要なし）は、平成 30 年度の実践に反映させた。





2・3 インタビューの導入 (平成 30 年度)

本年度も前年度をほぼ踏襲する形での実践を計画していたが、小学校での英語指導に不安を感じている学生が少なくないことから、マイクロ・ティーチングなどの主体的活動とルーブリックを用いた相互評価などの共同的学びの機会を増やすことにした。引き続き Learning Journal を用いた省察も継続した。

Strategy Training は、欧米の個人主義的思考の中で発達してきたものでもあり、教師の指導に従順で控えめな態度が美德とされる我が国の文化にはなじみにくい。英語力というよりむしろメタ認知能力が問われるため、半期 15 コマの授業でその効果を検証するのは難しい。だがここにこそ筆者が教育活動を通じて貫きたい「思い」がある。そこで Interview を行い、改めて学生の声に耳を傾けてみたいと考えた。

2. 3. 1 Interview の概要と事例紹介 —S さんの場合—

Interview への協力を求めると 8 名が申し出てくれたが、その一人 S さんの場合を紹介する。

<第 1 週> 第 1 時(ガイダンス)に、これまでの学習経験や学習スタイル、学習の目的等を振り返るための質問紙を配布し、Interview への協力を求めた。

<第 2 週～第 4 週> 随時面談に応じ、申し出のあった 8 名の学生から話を聞き、世間話も楽しんだ。

<第 3 週～第 15 週> 来室する頻度、その際の面談や支援の内容は様々であるが、8 名のうち 5 名が継続中である。ここからは、その一人 S さんとの Interview の内容を紹介する。

Interview 1 回目 <初回の授業(ガイダンス)について> 4 月中旬

S さん

- 昨年度受講した先輩から「かなりしんどいがためになる」と聞き、履修。
- ガイダンスでの Strategy Training の説明は、全くピンと来なかった。
- 脳科学の話 (Damasio, 2000) が面白かった。「頭と心がハッピーだと良い学びが起

こる」に惹かれた。

- 人をアメーバにたとえて、やり方次第で変化は可能だという話に感動を覚えた。
- YouTube で「アメーバの歌(筆者が Strategy Training の意味と可能性を伝えるために作詞作曲し動画サイトにアップしたもの)」を繰り返し聞いた。

Interview 2 回目 <英語学習について> 2 週間後の 4 月下旬

Sさん

- 中 1 と中 3 は英語教師が担任。発言と行動にズレがなく英語の授業も好きだった。
- 高校はひたすら暗記。和訳の確認がほとんど。指名されるから予習はした(受身)。
- 大学 1 年の教養教育科目の英語も和訳中心でつまらなかった。
- 英語は全く話せない。でもしゃべれるようになりたい。
- 授業中に体験した児童役での小学校英語活動は楽しかった。
- ビデオで見た現職教員は all English だったので、「ヤバイ！」と思った。

筆者

- ◆ ひとしきり話を聞いたのち、「話せるようになるための練習」を勧めた。何らかのテーマについて mapping を行い、フリー・トークを行うというもの。筆者が例を示し、早速やってもらった。mapping には 10 分ほどかかり、なかなか英語も出て来なかったが、「徐々に慣れるので心配は無用」と伝えた。
- 週に一度のペースで mapping を示しながら 2 ～ 5 分のフリー・トークを行った。
- 「スムーズに行く」と楽しい「疲れるがしばらく継続したい」とのこと。
- ◆ 「スピードを上げたい」と言うので、何度か同じ map を使って喋れば何回目かにペラペラになると助言。
- 翌日 Line で「7 回目でペラペラ感を実感」「考えながら喋る感じがわかってきた」とのメールが届く。

Interview 3 回目 <1 回目のマイクロ・ティーチングについて> 5 月上旬

Sさん

- Keyword Game をやったがボロボロだった。心が折れた。

筆者

- ◆ マイクロ・ティーチングも「慣れることが大事」であることを強調。たまたま翌日の土曜日に近隣の子ども会での英語あそびのボランティアが予定されていたので、一緒にどうかと誘うと「行ってみたい」と即答。

Sさん

- 後日談。子ども会に行ってみてよかった。絵カードと YouTube で見つけた歌を用意していった。小 3 の二人が興味を持ってくれて、あっという間に時間が過ぎた。
- 翌月も同行。絵本に興味を持ってくれた。子どもの表情がとても嬉しかった。

Interview 4回目 <2回目のマイクロ・ティーチングの直後> 5月下旬

- Sさん 内容が格段に良くなって、他の学生から喝采を浴びていたことを褒めると、
- 子ども会でウケたことを取り入れた。
 - なんとか全部英語でやったが、表情とか実物を示すことが大切だと思った。
 - やっていて楽しかったし、児童役の学生も楽しんでくれたのが嬉しかった。
 - 「活動が先、指導は後」っていうことが少しわかってきたような気がする。

筆者

- ◆ 自ら行動を起こすことが動機づけにつながることを確認しあった。

2. 3. 2 Interview の効用

改めて Interview の良さを感じた。

- (1) 打ち解けてくるにつれ、自由記述には見られない意見や感想が聞ける。
- (2) こちらも思考が促され、授業改善のアイデアが沸き、実行に移した。特に小学校での英語学習の経験がないために理解や共感を得られずにいることに気付いた際には、資料を追加したり視聴覚資料を紹介したりした。
- (3) Interview と自由記述の中から、共有しても良いと判断したものについてフィードバックを行った。すると、自由記述がより率直なものになった。初回の授業で Strategy Training について熱く語ったことを「性急だった。それでも自律性を高めてもらいたい」と伝え、マイクロ・ティーチングについて相談に来る者、Strategy Training を始めたいという者等で来室者が増えた。
- (4) 特に後半には、全体としてマイクロ・ティーチングへの取り組み方が良くなり、序盤と終盤でこれほど雰囲気の変容したのは珍しい。

時間的制約のため、インタビューを行える人数はごく限られたものとなるが、Learning Journal だけでは見えてこない学習者の実態や心情に気づくことができた。何より人は社会的な生き物であり、言葉を交わすことにより良好な関係性が生まれる。時代の変化もあり、学生たちに寄り添う姿勢、彼らの意見に耳を傾ける態度を教師自らが明確に示し、より効率の良い学びの実現のために尽力したい。

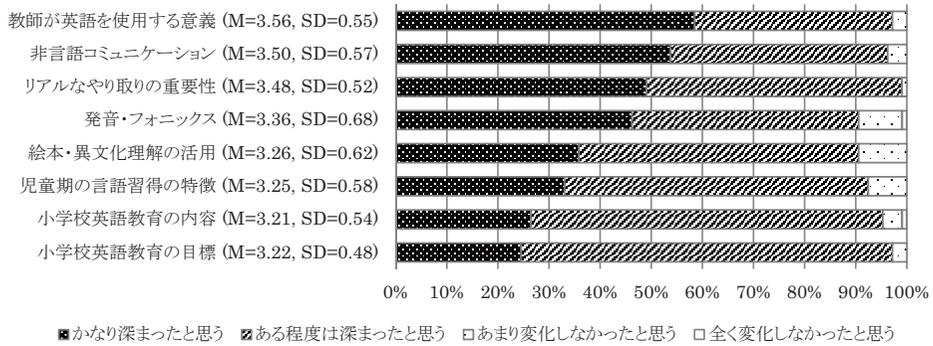
2. 4 アンケートの結果（平成 30 年度）

コア・カリキュラムにあげられた項目を参考に授業の内容について問うと、図 4（N=106、4 件法：4 = 十分理解できた、3 = ある程度理解できた、2 = ほとんど理解できなかった、1 = 全く理解できなかった）が得られた。

平成 29 年度にも行った小学校英語指導に関する情意についての調査（図 5、N=106、4 件法：4 = かなり高まった、3 = ある程度高まった、2 = あまり変化しなかった、1 = 全く変化しなかった）は平均値がそれぞれ 1.8, 1.5, 2.9 ポイント上がっている。

授業の前半では、Interview と自由記述から小学校における英語活動の特徴（言語習得のプロセスに配慮し、言語活動を通して体験的に行う、慣れ親しむ）と教師の英

図4 小学校英語教育についての理解は深まったか (%) N=106



語使用の必要性、やり取りの真正性（リアルさ）の3点について、「よくわからない」「納得がいかない」「そのためマイクロ・ティーチングに前向きに取り組めない」などの声が聞かれた。そこで、前述のように、授業資料を追加したり、デモンストレーションを頻繁に行ったり、的確な映像を探して紹介するなどした。後半は授業の様子からも幾分は状況が改善されていると期待していたが、その甲斐があった。

図5 小学校英語指導に対する情意の変化 (%) N=106

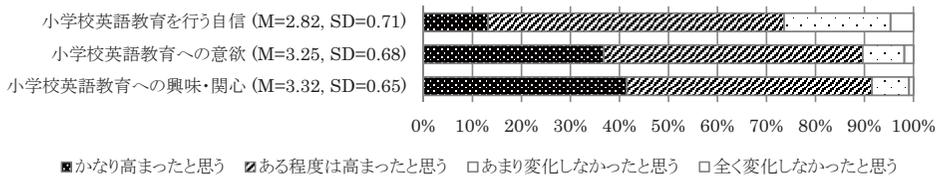
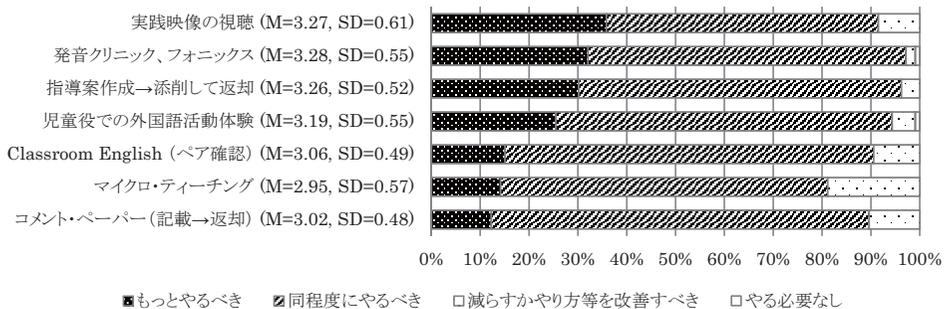


図6 授業中の活動について (%) N=106



さらに、授業中の活動に関する調査(図6、15回目の授業で実施、N=106、4件法: 4=もっとやるべき、3=同程度にやるべき、2=改善すべき、1=やる必要なし)も、永倉(2018)と同様に行った。永倉(2018)を踏まえての実践だったこともあり、後輩に対しても「同程度にやるべき」への回答が多数を占めた。ただ、現場の実践の様子をもっと見たいという声は依然として高く、その日のテーマと合った適切な映像を探し、ポイントを絞って紹介できるよう準備しなければならない。マイクロ・ティーチングについても映像か実演でもっと例を示して欲しい、筆者の実践例を録画してYouTubeにアップして欲しいといった今時の学生らしい要望もあった。

3. これまでの実践研究を振り返って ～抛り所にすべき先行研究と理論～

ここでは、実践内容と省察方法の確認のため、筆者自身の実践研究(表6)を振り返り、今後も抛り所とする理論に★印を、継続する活動と省察手法には✓印をつける。

表6 これまでの実践研究 —抛り所としたい理論と継続したい実践の検討—

研究① 英語活動の「意味」のレベル(真正性)を意識した授業(永倉, 2005)	
理論	・英語コミュニケーション活動に求められる条件と ★(2) 英語コミュニケーション活動における「意味」の4レベル(資料1参照)(三浦, 2003)。
実践	カルタ等を活用し✓(1)即時的で真正性の高い(リアルな)自己表現を促す。
データ	(a) 英語学習としての自己理解のためのアンケート (b) 序盤・中盤・終盤の発語数・受答え回数の推移 ✓(c) Learning Journal への自由記述。
研究② 自律学習者の育成を目指す Strategy Training(永倉, 2008)	
理論	(1) 学習ストラテジーの重要性 (★Dewaele & Furnham, 1999,)。 ★(2) 育成を目指す自律学習者とは (Benson, 2001、Holec, 1981)。 ★(3) 日本人特有のコミュニケーションの特徴(木下, 2001)
実践	タスク活動と併行した Strategy Training (★Chamot 他, 1999)。
データ	各方略を(a)使い方がわかったか、(b)有効か、(c)今後も使うか(5件法)
研究③ 動機づけのメカニズムに着目した授業実践とその検証(永倉, 2013)	
理論	★(1) 意図的動機づけモデル task-processing model (Dörnyei, 2003)。 ★(2) 学習に必要な無意識的感情 emotion の必要性(資料2, Damasio, 2000)。 ★(3) 教育的介入と外発的から内発的動機への変容 (Ryan & Deci, 2002)。 ★(4) 「期待×価値」理論 (Eccles & Wigfield, 2002)。
実践	楽しい活動。発話のための筋肉トレーニングと✓1分間のフリー・トーク。
データ	(a) 自由記述をラベル付け→授業内容が学習者の学習観に影響を与えていた。 ✓(b) 動機づけの6つの様態 (Ryan & Deci, 2002) の変容を探る質問紙調査 ✓(c) 「期待×価値」理論に基づく動機づけの変化を探る質問紙調査
研究④ リアリスティック・アプローチによる省察(永倉, 2017, 2018)	

理論	★(1) 営みへの理解を深める「探求的实践」(Allwright, D. 2006)。 ★(2) 実践研究の定義＝教師による質的・量的で体系的な探究で、営みの多面的理解を深め、teaching と learning の質を高める (Borg, S. 2010)。 ★(3) リアリスティック・アプローチの活用 (図 1, Korthagen et al., 2008)。
実践	✓ 「8つの問い(表1参照)」による省察。
データ	✓ (a) Learning Journal への自由記述。 ✓ (b) インタビュー。

振り返ってみると、実践研究のひとつひとつが次への関心・意欲を生む。また、授業の内容や指導スキルといった方法論的な視点から、授業の文脈や学習者の理解を求める認識論的な視点へ、そして教師としての信条や存在意義に対する問いへと関心がシフトしていることがわかる。また、永倉(2017)までと永倉(2018)では対象者に大きな違いがある。前者は英語を専攻する短大生と教養教育科目の英語を学ぶ大学生を対象とし、後者は小学校教員を目指しているが英語教育を専攻してはいない大学生で、小学校での英語指導の目的と内容の理解と指導力の養成を目的としている。当然のことながら、目的意識も情意も異なる。今後は後者について諸要因を見つめ直し、自律性を促す Strategy Training を具現化していく。

5. 実践研究法の方向性 — 授業と Strategy Training をいかに併走させるか —

授業と「効率のよい学習方略を試行し成長し続けようとする自律学習者の育成を目指す Strategy Training」を併せて行うにはどうすればよいのだろうか。

Interview に時間を割いたことで、改めて学生との関係性が前提となることを痛感した。また、受講生たちはいわゆる英語力の向上というより小学校において英語授業を行えるだけの力を身につけたいという気持ちが強いことにも気づかされた。

Strategy Training を遂行するためには、受講者の様々な表れを受け止めながら、必要であればプランの変更を厭わぬ姿勢が不可欠である。これまでの議論を踏まえ、次年度に向け具体的な方策を練り、シラバスの完成並びに質問紙等の準備に入る。

(1) 課題設定：授業と Strategy Training をいかに併走させるか

近い将来担任として小学校英語教育を担う者が大半であることから、実践的英語力を高める学習法を追求する Strategy Training と、新学習指導要領が求めているもの(言語習得理論に則って学びのプロセスと言語活動の真正性に着目している)が共通している点を強調する。ただし、受講者のニーズに鑑み、後者すなわち小学校英語教育の特徴を前面に出す。そして、こうした実践的英語使用に耐えうる新しい英語学習の在り方を学びながら、本授業の営みを省察・検討し共有することで Strategy Training としての側面を併せ持つ授業を行う。

(2) 実践計画：言語習得理論に則した内容とプロセス

Strategy Training を通して試行を促す学習方略と、コア・カリキュラムでそ

の理解と実践を求めている学習方略が共通している点に着目し、①小学校での授業実践の紹介→②児童役での授業体験→③教師役でのマイクロ・ティーチングの実施→④マイクロ・ティーチングの自己評価および相互評価→④理論上の裏付けの理解という手順で、授業を進める。その際には、小学校現場での活用頻度が高い指導スキルを優先する（使用する主な方略については資料3参照）。

(3) 省察方法：Learning Journal, Interview 及び質問紙調査による省察と検証

Strategy Training で重視しているモニタリングや自己コントロールの力は、マイクロ・ティーチングなどの活動に関する自由記述や Interview に基づき行う。質問紙は拠り所とする理論を参考に作成する（資料4～7参照）。

さて、小学校現場の授業実践においても、データの処理・分析においても、ICT (Information and Communication Technology) の利用が進んでいる。関連資料の提供、授業アイデアの紹介、データ収集並びにその分析には、録画・録音機器としてあるいは通信ツールとしてより積極的にスマートフォンを利用することや、無料で Google Forms や Quizlet といったソフトウェアを積極的に活用することにする。

このように、教師は実践を通じて身を持って「からだ」を使い「あたま」で考え「こころ」で感じ「思い」を巡らし、授業改善を図り続ける。そうした教師自らが行う実践研究の意義がいくらかでも学生に伝われば幸いである。

資料1 英語コミュニケーション活動の「意味」のレベル（三浦、2003）

				人間的な価値のある意味の授受
				伝達ニーズのある意味の授受
				場面や文脈に適合した意味の授受
				記号的意味の授受
レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4	

英語活動は人間の精神的欲求を満たすべきで、①メッセージ性、②メッセージの授受の必然性、③英語力に見

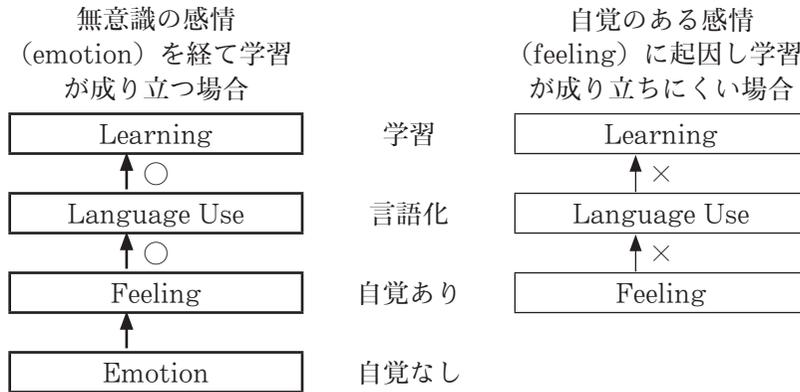
合ったものであることをあげ、特に②についてコミュニケーション活動の「意味」のレベルを4段階で提案。

資料2 学習に必要な無意識の感情 (emotion) (Damasio, 2000 を参考に筆者が作成)

健全な「からだ」を基盤とした「こころ」の無意識な働きにより「あたま」が機能し、この状態でこそ「ことば」が使われる。知性を磨くためには無意識のうちに湧き起こる“emotion”が重要な役割を果たし、この“emotion”の段階を経なければ「言語を使用しての学習」は成り立たないとしている。

例えば、「試験が近いから」という自覚に基づく“feeling”は、“emotion”を伴わ

ない「建前の動機づけ」となる危険性がある。つまり、教室での活動の中で“emotion”を経てやる気を自覚（“feel”）すれば、言語学習が成立する。



資料3 Chamot 他 (1999) を参考にした Strategy Training で用いる主な方略

学習者の自己理解のための方略	◇学習者としての自己理解及び学習内容とプロセスの省察等による自己管理能力の醸成（目標設定→自己・相互評価→次の目標設定等	① 1 回目の授業で、「学びたいこと」「伸ばしたい力」を自由記述で求める google forms → その結果についてディスカッション ② (1) Word & Phrase レベルのチャンツの練習 (2) Sentence レベルのチャンツの練習 (3) やり取りレベルのチャンツの練習 リアル度の理解（小テスト、活動を見せてリアル度を問う） ③ (1) Free Talk、(2)(1) を聴く、(3) 授業例ビデオを見る、google forms でコメント収集 → ラベル化 → フィードバック ④ マイクロ・ティーチング、google forms でコメント収集 → ラベル化 → フィードバック ⑤ 質問紙調査（資料 4, 5, 6, 7 参照）
聞く	▼ 予測する ▼ 背景知識を活性化する ● カード等視覚資料を利用する	筆者の Free Talk を聴く で体験 各自が Free Talk を行う で体験
理解	■ 語順・文型を意識する	意味順、線つけ英文法などを勧める
発音	■ 正しく発音する	フォニックス集中講座を勧める
語彙拡充	● 繰り返し聴く・発音する ● グループ化・分類する ● Look up & Say ● ICT の活用 ◆ ひとり言でブツブツ練習する	語彙を増やす各種 Strategy を紹介し学びやすさや定着度を体験・評価させる

慣れ	◆録音する、録画する	発表をスマホで録音→筆者にデータを送信またはビデオ録画
やり取り	◆言い換える ◆質問して確かめる ◆Fillerなどで時間をかせぐ ◆ジェスチャー・表情を利用する	Magical Quiz (Guessing Game) などの言語活動体験を通して いわゆる communication strategies への意識を促す

資料4 学習意欲の変容を調べる質問紙 (Ryan & Deci, 2002 を参考に考案、4 件法)

2, 7, 11, 13 = 内発的動機、4, 12, 16, 18 = 同一視的調整、
3, 5, 8, 14 = 取り入的調整、6, 9, 17, 20 = 外的調整、1, 10, 15, 19 = 無動機

本授業を履修する目的や本授業に対する考えについての質問にお答えください。
強く思う＝4 少し思う＝3, あまりそう思わない＝2, 全くそう思わない＝0

1	[小学校]英語[指導]力を重要視するのはおかしい	
2	受講者のみんなとコミュニケーションを図れるのは良いことだと思う	
3	せっかくの機会だから小学校英語[指導]について学んだ方がよいと思う	
4	人々との英語コミュニケーション能力を高めたい	
5	より効果的な英語学習法を身につけた方がよいと思うから	
6	資格(英検やTOEIC)を持っていると教採に有利だから受けてみたい	
7	英語あるいは英語圏の文化に興味があるから	
8	英語ができるとカッコいいと思う	
9	「小学校英語指導I」必修科目[と同等の科目]だから(現1年生から必修)	
10	「小学校英語指導I」は学びたくない/学ぶ必要はない	
11	「小学校英語指導I」を学ぶのが好き/楽しい	
12	「小学校英語指導I」を学ぶことは大事だと思う	
13	「小学校英語指導I」を通して新しい発見をするのが楽しみ	
14	小学校で英語指導ができないと困る/恥ずかしい	
15	「小学校英語指導I」での学びは時間の無駄だと思う	
16	英語学習を通して異文化を理解することは大切だと思う	
17	英語[指導]力は今後の学習や仕事に必要だと思う	
18	社会人に求められる総合的教養を高められると思う	
19	「小学校英語指導I」を学ばなければいけない理由がわからない	
20	卒業に必要な単位をそろえるため	

資料5 期待×価値理論(Eccles, J. S., & Wigfield, A., 2002)に基づく質問紙(4件法)

当てはまる = 4 少しは当てはまる = 3 あまり当てはまらない = 2

全く当てはまらない = 0

1	ゆくゆくは小学校での英語指導ができるようになると思う	
2	やればそれだけ英語力や英語指導力がつくと思う	
3	英語[指導]力を伸ばすのは私にとって大事なことである	
4	英語[指導]力を伸ばすための努力は価値のあることである	
5	「小学校英語指導Ⅰ」を学ぶのは楽しい	
6	「小学校英語指導Ⅰ」が好きだ	
7	「小学校英語指導Ⅰ」は将来役に立つと思う	
8	「小学校英語指導Ⅰ」を通じて思考や行動の幅が広がると思う	
9	「小学校英語指導Ⅰ」は難しい	
10	「小学校英語指導Ⅰ」はいろいろな意味で重荷である	

1, 2 = 期待、3, 4 = 達成価値、5, 6 = 内発的価値、

7, 8 = 実用的価値、9, 10 = コスト

期待×価値〔達成価値+内発的価値+実用的価値-コスト〕= 動機づけ

資料6 コア・カリキュラム「英語Ⅰ」が求めるものに関する質問紙(4件法)

当てはまる = 4 少しは当てはまる = 3 あまり当てはまらない = 2

全く当てはまらない = 1

1	授業実践に必要な聞く力を身に付けている
2	授業実践に必要な話す力〔やり取り・発表〕を身に付けている
3	授業実践に必要な読む力を身に付けている
4	授業実践に必要な書く力を身に付けている
5	英語に関する基本的な事柄(音声、語彙、文構造、文法、正書法等)について理解している
6	第二言語習得に関する基本的な事柄について理解している
7	児童文学(絵本、子供向けの歌や詩等)について理解している
8	異文化理解に関する事柄について理解している

資料7 コア・カリキュラム「英語科教育法」が求めるものに関する質問紙（4件法）

当てはまる＝4 少しは当てはまる＝3 あまり当てはまらない＝2

全く当てはまらない＝1

1	【学習指導要領】小学校英語教育の目標、内容について理解している
2	主な教材の内容、特徴について理解している
3	小中高の連携と小学校の役割について理解している
4	児童や学校の多様性への対応について基本的な事柄を理解している
5	教師が英語を使用することの重要性を理解している
6	児童期の言語習得の特徴（言語活動を通して／学びのプロセス（類推→理解、音声→文字））を理解している
7	意味のある（リアルな）やり取りの重要性について理解している
8	英語の発音・フォニックスの指導について理解している
9	ジェスチャーなどの非言語要素を含むコミュニケーションについて理解している
10	英語で語りかけ、児童の発話を促すことができる（Q&A→指示）
11	発話を引き出し、児童とのやり取りを進めることができる（Small Talk→例示→指示）
12	読む活動・書く活動への導き方を理解している
13	適切な題材選定・教材研究の仕方について理解している
14	指導計画（単元計画、学習指導案）について理解し立案することができる
15	模擬授業の準備・実践を行い、省察を行うことができる
16	ALT とのチーム・ティーチングの在り方についての理解している
17	ICT を活用について理解している
18	評価（パフォーマンス評価、can-do の活用）について理解している

参考文献

- Allwright, D. (2006). Six promising directions in applied linguistics. In S. Gieve. & I. K. Miller (Eds.), *Understanding the language classroom*, 1-17. New York: Palgrave Macmillan.
- Borg, S. (2010). Language teacher research engagement. *Language Teaching*, 43, 391-429.
- Benson, P. (2001). *Teaching and researching autonomy in language learning*. Harlow: Longman/Pearson Education.
- Chamot, A.U., Barnhardt, S., El-Dinary, P.B., & Robbins, J. (1999). *The learning strategies handbook*. White Plains, NY: Addison Wesley Longman.
- Damasio, A. (2000). *The feeling of what happens*. New York: Mariner Books.
- Dewaele J-M. and Furnham A (1999). Extraversion: The unloved variable in applied linguistic

- research. *Language Learning* 43:3.
- Dörnyei, Z. (2003). Attitudes, orientations, and motivations in language learning: Advances in theory, research, and applications. *Language Learning*, 53, supplement, 3-32.
- Eccles, J. S., & Wigfield, A. (2002). Motivational beliefs, values, and goals. *Annual Review of Psychology*, 53, 109-132.
- Holec, H. (1981). *Autonomy in foreign language learning*. Oxford: OUP.
- 木下和好 (2001). 『清書がわかれば英語がわかる!』 pp.27～28 東京：ダイヤモンド社
- Korthagen, F. A. J., Kessels, J., Koster, B., Lagerwerf, B., & Wubbels, T. (2008). *Linking practice and theory: The pedagogy of realistic teacher education*. NY: Routledge. [武田信子 (監訳) (2010). 『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社]
- 永倉由里 (2005). 「主体的な学びと意味あるコミュニケーション活動による学生たちの変容」『中部地区英語教育学会紀要』第 35 号 pp.231-238
- 永倉由里 (2007) 「第二言語習得研究を活かした日本人のためのストラテジー・トレーニングの方向性」『中部地区英語教育学会紀要』第 37 号 151-158 頁
- 永倉由里 (2008) 「第二言語習得研究を活かした日本人のためのストラテジー・トレーニング」『中部地区英語教育学会紀要』第 38 号 429-436 頁
- 永倉由里 (2013). 『『Learning Journal』から読み取る英語授業が学習者の学習観に与える影響』『中部地区英語教育学会紀要』第 42 号, 235-242.
- 永倉由里 (2017). 「英語授業の質的向上を目指したリアリスティック・アプローチによる省察」『中部地区英語教育学会紀要』第 46 号, 157-164.
- 永倉由里 (2018). 「小学校英語指導 I における体系的省察による実践理解と授業改善の試み」『中部地区英語教育学会紀要』第 47 号, 189-196.
- 三浦 孝 (2003) 「日本の対人コミュニケーション状況と英語教育の使命」『中部地区英語教育学会紀要』第 33 号 pp.65～72
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research* (pp. 3-33). New York: University of Rochester Press.
- 滝沢雄一・藤田卓郎・河合創・酒井英樹・清水公男・高木亜希子・田中武夫・永倉由里・宮崎直哉・山岸律子・吉田悠一 (2016). 「英語教育における実践研究の定義に関する検討—文献レビューからの考察—」『中部地区英語教育学会紀要』第 45 号, 273-280.